

社会的な見方・考え方を働かせ、 他者と共に学びを深める生徒の育成

— 1 年社会科「井ヶ谷古窯がつなぐ 刈谷と日本」の実践を通して—

刈谷市立刈谷南中学校 教諭 杉浦 碩恭

< 研究の概要 >

本研究では、生徒の「①社会的な見方・考え方を働かせる姿」と「②他者と共に学びを深める姿」の実現を目指した。そのために、教師が①自作のワークシートや資料・発問の工夫をしたり、②刈谷で生産された器を基に、専門家と対話する機会を設けたりして研究を進めた。生徒たちは、見方・考え方を広げて課題解決に向けて意欲的に取り組み、他者と共に学びを深めていった。

< 検索用キーワード >

社会的な見方・考え方	関連付ける	対話
歴史博物館	専門家	地域教材 井ヶ谷古窯

I 主題設定の理由

「刈谷ってだけで、何だか誇らしいなあ」

1学期の朝の会で、徳川家康の母「於大の方」について話をした際、生徒が発した言葉である。生徒たちが、自分たちの住んでいる刈谷市を大切に思っていることが感じ取れる。そこで「なぜ誇らしく感じるのかな」と問いかけると、「家康という、日本で有名な武士の母が刈谷出身だから」と答えた。それに対してさらに「じゃあ、他にも刈谷にはそんな歴史はあるのかな」と問い返すと、生徒たちはしばらく考えるも、誰からも返事はなかった。

1学期に社会科についてのアンケートを実施したところ、資料1のような結果が得られた。Q1は、3.12であり、多くの生徒が身近な地域の歴史に興味をもっていることが分かる。5月に実施した歴史博物館見学でも、真剣な表情で学芸員の方の話を聴いていた。Q2でも3.01であり、資料を基に自分の考えをもつ生徒が多いという結果であった。しかしQ3、Q4では、それぞれ2.58、2.53と、低い数値であった。現に、授業の中でも複数の出来事を関連付けて考えたり、話し合いを通じて自分の考えを変化させたりすることは少ないように感じる。1学期の学習では、歴史の内容を理解するために意欲的に学ぼうとするものの、「なぜそうだったのか」という原因や背景の追究をするには至らなかった。加えて、異なる視点から考えた生徒の意見を取り入れて、考えを深める発言は出てこなかった。

学習指導要領解説中学社会科編には、「深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。（中略）生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすること」とある。そのためには、生徒が社会的事象をさまざまな視点から捉えて考えることが大切であり、他者と対話し、課題を追究する取り組みが不可欠である。そうすることで生徒たちはこれからの社会に必要な見方・考え方を養うことができるだろう。子どもたちが新しい時代を生き抜く力を培うことを本研究で目指す。

以上のことを踏まえ、本研究の主題を「社会的な見方・考え方を働かせ、他者と共に学びを深める生徒の育成」とし、研究を進めることとした。

II 研究の構想

1 目指す生徒像

本研究では、生徒の「社会的な見方・考え方を働かせる姿」と「他者と共に学びを深める姿」の2つの姿の実現を目指す。それぞれ、具体的にどのような姿を指すのか、以下のように定義する。

（1）社会的な見方・考え方を働かせる姿

本研究における「社会的な見方・考え方を働かせる姿」は、課題を追究する活動において、社会的事象を多様な視点で着目して捉え、時代ごとの変化を明確にしたり、事象同士の結果や影響で関連付けたりして考える姿とする。例えば、井ヶ谷古窯が発展した理由について、発展した時代の様子や変化に着目し、日本の国家史（以下：中央史と定義）の内容と関連付けて追究する姿である。

（2）他者と共に学びを深める姿

本研究では、「他者」を学級の仲間、専門家と定義する。本研究における「他者と共に学びを深める姿」は、他者と共に、対話的な学びを通して、粘り強く課題を追究する姿とする。例えば、実物資料を活用した仲間との話し合い活動や、学芸員との対話を通して、井ヶ谷古窯が発展した理由に対する初めの考えを変化させたり、根拠を明確にしたりして追究する姿である。

資料1 学級実施アンケートの結果（R5.7月）

社会科アンケート	平均値
Q1：愛知県や刈谷市の歴史に興味がある	3.12
Q2：資料を基に考えをもつことができる	3.01
Q3：2つの出来事を比較したり、関連付けたりして考えることができる	2.58
Q4：色んな人の意見を取り入れて、考えを深めることができる。	2.53
学級の生徒31人にアンケートを実施。以下の4段階で回答 4…とてもそう思う 3…そう思う 2…少しそう思う 1…そう思わない	

2 研究の仮説

目指す生徒像に迫るため、研究の仮説を資料2のように設定する。

<仮説①>	生徒が多様な視点に着目して課題を追究することができる魅力的な教材を開発し、教師自作ワークシートの活用や、発問と資料提示の工夫をすれば、生徒は社会的な見方・考え方を働かせて考えることができるだろう。
<仮説②>	博物館を積極的に活用し、実物資料を活用して仲間と対話する場の設定や、専門家と対話する機会を設けた話し合い活動を工夫すれば、生徒は他者と共に学びを深めることができるだろう。

資料2 研究の仮説

3 仮説に対する具体的な手だて

仮説を受けての具体的な手だてを、以下のように講じる。

<仮説1に対する具体的な手だて①>教師自作ワークシートの活用

生徒の見方・考え方を広げることができるような教師自作ワークシートの活用を行う<資料3>。例えば単元の深める段階では、ワークシートに同じ年代の「井ヶ谷古窯史」と「中央史」を並べて配置し、生徒たちが井ヶ谷古窯の発展と、中央史の影響を関連付けて捉えることができるようにする。

中央史	世紀	井ヶ谷古窯史
・大和政権の成立	4世紀末	
→様々な地域で前方後円墳が造られる。	で	
・渡来人の人々との交流が活発になる。	5世紀	・大和の陶器で須恵器の生産が始まる
・大和政権のワカタケ大王が勢力の範囲を広げる。		→主に祭祀(祭り)や副葬品
		・陶器類とほぼ同時期に日本の様々な地域で須恵器の生産が始まる。
		(福岡、香川、岡山、愛媛(高松藩) など)

資料3 自作ワークシート

<仮説1に対する具体的な手だて②>発問と資料提示の工夫

生徒の新たな視点への気付きを促す発問と資料提示の工夫をする。例えば単元の深める段階では、生徒が平安時代の朝廷と灰釉陶器の関係という視点に気付くことができるように、生徒の言葉を使って切り返し発問を行う。

井ヶ谷古窯が衰退した頃について追究する活動では、資料4を提示する。生徒が井ヶ谷古窯の衰退の原因を、承久の乱の結果や影響と関連付け、より多様な視点に着目して課題を追究する生徒の姿につなげたい。

承久の乱(1221年)でこの地を治めていた重原氏が京都方についたため鎌倉幕府に荘園を没収され、代わりに、二階堂氏が地頭職に就いた

資料4 承久の乱に関する資料

<出典>刈谷市教育委員会. わたしたちの郷土～刈谷歴史伝～. 2022. 4月. p.6, 18-22

<仮説2に対する具体的な手だて③>実物を活用した対話

実物資料を活用して、仲間と対話する場を設ける。例えば、単元の出会う段階では、刈谷市歴史博物館(以下:歴史博物館)の学芸員を授業に招く。3種類の器の実物を用意していただくことで、生徒は器の材質や、触感について仲間と対話して考えを変化していくだろう。また、実物資料を基に意見を出し合うため、それぞれの器の細かい特徴まで捉えて話し合い、根拠を明確にしていくことができるだろう。

<仮説2に対する具体的な手だて④>専門家との対話

単元のまとめる段階でも、歴史博物館の学芸員を授業に招く。単元を貫く課題「なぜ井ヶ谷古窯が発展したのだろうか」について話し合い、専門家として生徒の考えを聞いてもらったり、見解をお話いただいたりする。生徒が学芸員との対話を通して得た知識を活用して、課題に対する考えを変化させたり、根拠を明確にしたりして追究する姿につなげたい。

4 研究単位について

(1)教材について

本研究では、中学校社会科学学習指導要領の歴史的分野「A(2)身近な地域の歴史」の単元「井ヶ谷古窯がつなぐ 刈谷と日本」を扱う。

井ヶ谷古窯群は刈谷市の北部に存在し、8世紀後半に始まり、13世紀末まで続いた古

窯である。日本三大古窯の一つであり、当時の最先端であった猿投窯の南端に位置する。近年もその調査や整理は進んでおり、2023年には、歴史博物館にて企画展「井ヶ谷古窯展－いにしへの刈谷のものづくり－」が開催された。

本研究の単元では、歴史博物館の協力を得て、井ヶ谷古窯から出土した陶器の実物を導入で扱う。生徒の多くは、身近な地域である刈谷市内から古代から中世の器が出土したことに驚き、井ヶ谷古窯の発展の理由について様々な視点から考えるだろう。井ヶ谷古窯の発展と、中央史の関連に着目した生徒に、生徒の言葉を使って切り返し発問をしたり、「承久の乱前後の地頭配置の様子」の地図資料を提示したりする。社会的な見方・考え方を働かせ、日本と井ヶ谷古窯の様子の変化を比較し、それぞれの事象の結果や影響を関連付けて考える姿につなげたい。

また、井ヶ谷古窯の発展については、古代律令期の税制や、承久の乱による支配者の没落、井ヶ谷の地理的な環境とさまざまな社会的事象が関連しており、生徒は自分の興味関心に応じて課題追究ができる教材である。また、歴史博物館には質の高い知識をもつ学芸員も在籍しており、他者と共に学びを深めていくことができる教材であると考えられる。

以上より、生徒が社会的な見方・考え方を働かせ、他者と共に学びを深める姿の実現に適していると考え、次節資料5のように単元の計画を立てた。

(2) 単元の計画 (9時間完了)

段階	学習内容	手だて
出合う	○井ヶ谷古窯から3種類の器が出土したことから、どんなことが言えるか話し合う。① 生徒の思考① 見た目も、作られた時代も違う3種類の器が出てきたということは、長い間器作りがさかんだったということだ。井ヶ谷古窯が発展した理由について追究したい。	手だて③ ・実物を活用した話し合い活動の場の設定
深める	なぜ井ヶ谷古窯は発展したのだろう ○井ヶ谷古窯がはじまった頃の様子を調べる。② 生徒の思考② 須恵器生産が早くから始まっているから、渡来人が関わっていそう。でも、なぜ井ヶ谷で作られた器の種類が須恵器から変化していったのだろう。 ○灰釉陶器について調べ、話し合う。③④ 生徒の思考③ 井ヶ谷の器を「貢納」するくらい、朝廷と関係が深かったと分かった。でも、なぜ人気になったのに、また器の種類が変化して、作られなくなるのだろう。 ○井ヶ谷の焼き物づくりが山茶碗へ変化していったころの刈谷と日本について調べる。⑤ 生徒の思考④ 武士の世の中になって、井ヶ谷古窯は衰退していった。その土地を支配する人や、世の中の政治の中心になっている人の影響を受けていそう。	手だて① ・見方・考え方を広げる自作ワークシートの活用 手だて② ・新たな視点への気づきを促す発問の工夫 手だて② ・新たな視点への気づきを促す資料提示の工夫
まとめる	○井ヶ谷古窯が発展した理由を考え、自分の意見をまとめる。⑥ ○井ヶ谷古窯が発展した理由について話し合う。⑦ 生徒の思考⑤ 井ヶ谷古窯の発展には、土地の地形や、朝廷との関係。中国との関わりまで関係すると分かった。刈谷も、日本とつながっているのだと実感した。	手だて③ ・専門家との対話の場の設定
生かす	○井ヶ谷古窯の歴史を年表に表す。⑧ ○単元のまとめをする。⑨	資料5 単元の計画

5 仮説の検証方法

本単元では、生徒1名（生徒A）を設定し、生徒Aの発言やワークシート記述の内容の変容から仮説を検証する。

（１）生徒 A の実態

資料 6 は、生徒 A の社会科アンケートである。社会科の授業に前向きに取り組んでおり、意欲的に調べ学習に臨んで発言したり、歴史博物館見学で質問したりする姿が見られた。一方で、Q 3「2 つの出来事を比較したり、関連付けたりして考えることができる」は「そう思わない」Q 4「色んな人の意見を取り入れて、考えを深めることができる」は「少しそう思う」、と回答した。

資料 6 生徒 A の社会科アンケート結果	
Q 1 : 愛知県や刈谷市の歴史に興味がある	
回答 : とてもそう思う (4)	
Q 2 : 資料を基に考えをもつことができる	
回答 : とてもそう思う (4)	
Q 3 : 2 つの出来事を比較したり、関連付けたりして考えることができる	
回答 : そう思わない (1)	
Q 4 : 色んな人の意見を取り入れて、考えを深めることができる	
回答 : 少しそう思う (2)	

1 学期「律令国家としての歩み」の単元では、「律令国家としての税制のしくみを調べる」という課題について追究した後、振り返りを資料 7 のように記述した。分かったことを中心に書いており、なぜその仕組みが整えられたのかという原因や、どんな出来事が関連付いているかについての記述はない。また、仲間の意見や資料に対して疑問に思ったことや、新たに追究したいことについての記述もない。授業内容を理解することに関心はあるが、社会的事象の関連、結果や影響まで考えることは少なく、学びを深めていく姿までつながっていないことが分かった。

租、庸、調と税の仕組みを整えることで、朝廷に確実に物が入ってくるようにしたのだと分かりました。でも、農民はたくさんの税を払わないといけなくて、大変だと思いました。

資料 7 生徒 A の 1 学期の振り返り

また、仲間の意見や資料に対して疑問に思ったことや、新たに追究したいことについての記述もない。授業内容を理解することに関心はあるが、社会的事象の関連、結果や影響まで考えることは少なく、学びを深めていく姿までつながっていないことが分かった。

（２）生徒 A に期待する姿

- ・ワークシートの活用や、発問と資料提示の工夫を受けて、社会的事象を多様な視点に着目して捉え、時代ごとの変化を明確にしたり、事象同士の結果や影響を関連付けたりして考える姿。
- ・博物館との連携によって、実物資料を活用した仲間との対話活動や、学芸員との対話を通して、他者と共に、対話的な学びを通して、粘り強く課題を追究する姿。

Ⅲ 実践と考察

1 実物資料によって、仲間との対話が充実し、考えを変化させた生徒 A

第 1 時の導入で、歴史博物館見学での学びを振り返った。そこで、「今日は、3 種類の器を学芸員の方に持って来ていただきました」と伝えると、本物の器を見られることに驚いた様子であった。資料 8 が、当日に生徒へ提示した 3 種類の器である。

それぞれの器の名前は伏せ、グループに 1 セット実物を用意した。「3 種類の器を、作られた年代順に並べ替えよう」と投げかけると、生徒たちはすぐに器を触ったり、細かい模様を間近でじっと見つめたりして考



え始めた。自然にグループの仲間と会話が始まり、「①の器は重くて古そう」「いや、③の器はざらざらした触感で作りが雑に見えるからこっちの方が古いと思うけど」と、仲間の意見を確かめながら考える姿が見られた。その後、教師が各器の作られた時代と、現在の刈谷市にある「井ヶ谷古窯」から全て出土したものだと伝え、生徒は、「刈谷から、器が出てくるなんて知らなかった」「違う種類なのに、全部井ヶ谷なのか」とさらに驚いた様子であった。そこで、「3 種類とも井ヶ谷から出土していることからどんなことが考えられるだろう」と発問した。

生徒 A は並び替え活動に積極的に参加していた。発問に対しては、3 種類もある実物資料を前に苦労して考えている様子であった。しかし実物を何度も見たり触ったりしながら

粘り強く自分の意見を書いていた。意見を基に、グループ対話する時間を設けると、それぞれの班で活発な対話が行われた。資料9は生徒Aが入っていたグループ対話の記録である。

C1「器が薄くなっている」やC2「きれいに作れていた」は、実物資料の材質や触感の特徴を基に対話していることが読み取れる。生徒Aも3種類の器を「乾いた感じ」と表現した。実物資料を提示したことで、3種類の器の細かい特徴まで捉えて対話ができ、自分の意見の根拠を明確にしている姿と読み取れる。さらにこのグループは、C1「こんなに堅く、丈夫そう」という器の特徴から、渡来人との関係へと対話の内容が移った。そして生徒Aは「渡来人も関係がありそう」と今までになかった意見をつぶやいた。これは、実物資料から捉えた細かい特徴を基に仲間と対話したことで、生徒Aが考えを変化させた姿と言えるだろう。

グループ対話後に学級全体で行った話し合い活動の内容を基に、単元を貫く課題を「なぜ井ケ谷古窯が発展したのだろう」と設定し、単元を進めていくことにした。第1時の振り返りで、生徒Aは資料10のようにまとめた。

「刈谷が器を作るのに適した気候」からは、話し合いを通して自分の考えの根拠を明確にしたことが分かる。そして「渡来人から教えてもらう須恵器が作られていた」からは、実物資料によって対話が充実し、自分の考えを変化させていることが読み取れる。さらに、「作られている器の種類が変わっていった（中略）これから調べていきたい」と表現した生徒Aの姿は、対話的な学びを通して、粘り強く課題を追究する意欲を高めている姿と言えるだろう。以上より、実物資料を活用して仲間と対話する場を設けたことは、生徒Aが考えを変化させたり、根拠を明確にしたりする姿につながったと言えるだろう。

2 自作ワークシートによって、井ケ谷古窯と渡来人の関係に着目した生徒A

第2時では、単元を貫く課題を受け、井ケ谷古窯が始まった頃の様子を調べた。前時で「刈谷と日本のつながりを調べてみたい」と書いた生徒の振り返りを紹介した。同じように刈谷と日本の関係について記述した生徒はどのくらいいるか尋ねると、出席生徒30人のうち、14人が挙手をした。そこで、同じ年代の「井ケ谷古窯史」と「中央史」を並べて配置したワークシートを基に活動を始めた。

「中央史の中で、井ケ谷古窯の歴史と関連付けられる出来事を線で結ぼう」と投げかけると、生徒たちはワークシートと真剣に向き合う様子であった。生徒Aもワークシートと資料集の古墳時代のページを広げて考えていた。資料11は、生徒Aのワークシートである。中央史「渡来人の人々との交流が活発」と「須恵器の生産

- C1：だんだんと器の種類が変わるごとに、器が薄くなっているよね。
井ケ谷も進化していたことが分かる。
- A：たしかに、文化が発展していたんじゃないかな。冬は降水量が少ないし、どの器も乾いている感じがある。それを使って器作りができたんじゃない？
- C2：私も、気候が関係していると思う。美術の時に刈谷は焼き物に適した気候だと聞いたから、作れていたのだと思う。
- A：あ、確かに美術で聞いたね。やっぱり気候は関係がありそう。
- C2：それに、こんなにきれいに作れていたことは、奈良時代から、井ケ谷はとても技術力が高いよね。
- C3：そうだね。でも、たしか須恵器って、渡来人が教えてくれた器だったよね。教えてもらったのかな。
- C1：じゃないと、こんなに堅く、丈夫そうに作れないよね。
- C2：でも、刈谷は中国とは近くないよ。
- A：どうやって伝わってきたのだろう。
でも、渡来人もなんだか関係ありそう

資料9 第1時のグループ対話の記録（一部）

私は、みんなの意見を聞いて、器が作れるということは、もともと刈谷が器を作るのに適した気候で、その刈谷に技術をもった人が集まってきたのではないかと思います。でも、渡来人から教えてもらう須恵器が作られていたり、作られている器の種類が変わっていったり、今は井ケ谷で器が作られていないことを考えると、井ケ谷で器作りがさかんになった理由はまだまだありそう
だと思ったのでこれから調べていきたいです。

資料10 第1時の生徒Aの振り返り

日本の歴史 (数:P.55~ 資:P.28~)	世紀	器作りの歴史 (刈谷に特に関係する出来事は太字下線)
・大和政権の成立 →様々な地域で前方後円墳が造られる。	4世紀	
・渡来人の人々との交流が活発になる。 ・大和政権のワカタケ大王が勢力を和歌山に広げる。	5世紀	大坂の陶器で須恵器の生産が始まる →主に祭籠(祭カ)や新羅器 ・陶器類とほぼ同時期に日本の様々な地域で須恵器の生産が始まる。 (福岡、香川、岡山、愛媛(備前窯) など)
		 

資料11 第2時の生徒Aのワークシート

が始まった」を含め4本の線で結び、事象同士を関連付けていること分かる。

その後、自分の意見を書く時間で、生徒Aは資料12のように記述した。「渡来人の人々との交流(中略)始まった頃が同じ」からは、ワークシートに同じ年代の「井ヶ谷古窯史」と「中央史」を並べて配置したことで、生徒Aが2つの出来事を関連付けて捉えていることが分かる。また、「須恵器の技術をもった人が、広い範囲で広めたから、井ヶ谷まで伝わった」と、渡来人との交流が活発になった影響を、井ヶ谷古窯の発展と関連付けて捉えようとしていることが読み取れる。これより、自作のワークシートを活用したことは、生徒Aが見方・考え方を広げて考える姿につながったと言えるだろう。

渡来人の人々との交流が活発になったことと、猿投窯で須恵器の生産が始まった頃が同じということから考えました。須恵器の技術をもった人が、広い範囲で広めたから、井ヶ谷まで伝わったのだと考えます。だから、やっぱり井ヶ谷古窯は、渡来人と関係がありそうだと思います。

資料12 第2時の生徒Aの意見

3 繰り返し発問によって、井ヶ谷古窯と朝廷の関係に気付いた生徒A

第3時の導入で、「作られている器の種類が変わっていった」ことに着目していた第1時の生徒Aの振り返り(資料10)を紹介した。そこで、須恵器から変化した「灰釉陶器」について調べ学習を行った。第4時では、生徒が灰釉陶器についてそれぞれに追究したことを発表していった。資料13は、授業記録の前半一部である。

C1: 灰釉陶器は須恵器と比べて高温で焼かれると分かりました。

C2: C1が「高温で焼かれる」と言っていたけれど、高温で焼くことによって水がしみ込まず、丈夫な器が出来上がると分かりました。

C3: 灰釉陶器は、「釉薬」という薬を表面に塗ってから焼くことで表面がなめらかになるため、質が良く扱いやすい陶器だと分かりました。

C4: しかも、釉薬は、最初は自然に器に灰が被って器が完成した「自然釉」が基となり、それを日本で初めて人工的に完成させたのが、灰釉陶器であり、最先端の技術です。

(中略)

A: 灰釉陶器は、使いやすく高級感もあるので、広い範囲で使われるようになったことで、たくさん作られるようになりました。

C5: 平安時代の初めは役所や寺院の人々、貴族が使っていた高級品だったから、皆がよさを広めて、色んな身分の人が使い、人気になっていった器と分かりました。

T1: 貴族も使っていたのか。貴族ってどうやって灰釉陶器を手に入っていたのだろうね。

(C: 各々につぶやき、関心を示す)

T2: この資料に、灰釉陶器について書いてあるのだけど、この資料の中から、「貴族」と「灰釉陶器」が繋がっていることが分かる言葉はどれだろう。

(資料提示)

資料13 第4時の授業記録(前半一部)

まず、灰釉陶器と須恵器の違いについて多く挙げられた。「灰釉陶器は、須恵器と比べて高温で焼かれるため、水がしみ込まずに丈夫である」や、「灰釉陶器は釉薬を塗ってから焼くことで表面がなめらかになるため、質が良く扱いやすい陶器」といった意見である。

続いて多く挙げられたのは、灰釉陶器が当時どのような人々に親しまれたかという意見である。生徒AやC5は、灰釉陶器が広い範囲で使われており、寺院や役所の人に加え、都に住む貴族も灰釉陶器を使っていたという考えを発表した。

それに対して、「貴族ってどうやって灰釉陶器を手に入っていたのだろう」と生徒の言葉を使って繰り返し発問をすると、生徒たちは「買ったのかな」「もらえるのじゃないかな」などと各々につぶやいた。生徒たちの、貴族と灰釉陶器の関係への関心が高まっているように感じたため、資料14を生徒たちへ提示し、「資料の中から、貴族と灰釉陶器の関係が分かる言葉はどれだろう」と発問した。生徒たちは手元に配布された資料を基に、貴族と灰釉陶器の関係を探った。

井ヶ谷窯が最も発展するのは8世紀末～9世紀前半です。この時期に生産を拡大し、その生産量は猿投窯の主体である黒笹地区や鳴海地区に匹敵するほどでした。このことは、尾張～三河にまたがって広がる猿投窯の中で、井ヶ谷窯のみ三河国であったことと深いかわりを持っていると思われます。これまで三河国の窯業の中心地であった豊橋市南東部地域に代わって、猿投窯に含まれる井ヶ谷窯の製品が貢納され、生産が拡大しました。

『延喜式』に記載されている「陶器貢納国」として河内、和泉(現在の大阪府)、尾張、備前(現在の岡山県)の須恵器生産国と並んで三河国があげられているのは、この井ヶ谷窯の発展があったためと考えられています。

資料14 貴族と灰釉陶器の関係を示す資料

<出典>刈谷市歴史博物館「井ヶ谷古窯—いにしへの刈谷のものづくり—」2023.7 企画展パンフレットより

C 6 : 「貢」という字が「朝貢」と同じだから、朝廷に貢物をして納めるという意味だと思う。
 T 3 : この頃の、朝廷に地方の物を納める税の制度って何だったかな。
 (C : 「あ、あったなあ。何だったかなあ」とつぶやいたり、すぐに教科書で調べたりする)
 C 7 : 分かりました。「調」です。
 T 4 : そうだね。じゃあ、「調」として朝廷に納めることと、「貢納」として朝廷に納めることって、何が違うの？
 C 8 : 「調」は、税だから強制的に納めさせられ、「貢納」は貢ぐことだから、自主的だと思う。
 C 9 : 井ケ谷窯の器を朝廷の人に知ってほしくて、たくさん朝廷に貢いだのだと考えられる。
 T 5 : みんなはC 9の意見についてどう思う？
 C 1 0 : 確かに初めの方は、C 7の言った通りに自主的に貢いでいたのかもしれないけれど、資料にある「陶器貢納国」の5つの国の中に入っていたことを考えると、5つの国の陶器を朝廷が気に入っていたから、朝廷や天皇、貴族が欲しがっていたのではないかと考えられます。
 T 6 : 話し合いの内容から考えると、井ケ谷古窯は朝廷にとってどんな役割があったのだろう。
 C 1 1 : 最新技術を提供してくれ、貴族たちには欠かせない場所。
 C 1 2 : 今でいう、「最新ゲーム機」を生産するような、みんなが欲しがるものを生産するところ。
 C 1 3 : 高い技術の人が集まってきているので、質の高い製品をたくさん生産してくれる場所。

資料 1 5 第4時の授業記録(後半一部)

資料 1 5 は、後半の授業記録である。中でも「貢納」という言葉に着目した C 4 が、『貢』という字が『朝貢』と同じだから、朝廷や貴族に貢物をして納めるという意味だと思う」と発言した。そこで「納める」という C 6 の発言を使って、「朝廷に地方の物を納める税の制度って何だったかな」と切り返し発問を行うと、C 7 が律令の税制「調」だと答えた。そこでさらに、「調として朝廷に納めることと、貢納として朝廷に納めることって、何が違うの？」と発問した。生徒たちはその違いを仲間と考え、井ケ谷古窯の灰釉陶器が、朝廷も欲しがるほどの技術力の高さがあったということに気付いた。最後に「井ケ谷古窯は朝廷にとってどんな役割があったのだろう」と発問すると、C 1 1、1 2、1 3 のように井ケ谷古窯の発展と朝廷の関係を関連付けて考える生徒の発言がたくさん見られた。

生徒 A は、話し合いの前は、灰釉陶器は質が良く、広い範囲で使われていたという点に着目していた。切り返し発問を工夫した話し合い活動では積極的に参加し、特に「調」と「貢納」の違いを考える際には、「貢納って誰でもできるのかな」とつぶやきがあり、朝廷と井ケ谷窯の関係という視点から課題を追究している様子があった。資料 1 6 は生徒 A の振り返りである。

『貢納』で貴族の文化を支えていた」「利益もあったし、大きくなっていった」からは、貴族と灰釉陶器の関係に気付き、関連付けて考えていることが分かる。さらに、「井ケ谷は適した環境」「材料も豊富」と、「貴族の文化を生み出す側」からは、井ケ谷古窯の地理的環境と、貴族との関係を関連付け、新たな視点に着目して考えていることが読み取れる。以上より、生徒の言葉を使った切り返し発問の工夫をしたことで、生徒 A は新たな視点へ気付き、考えることができたと言えるだろう。

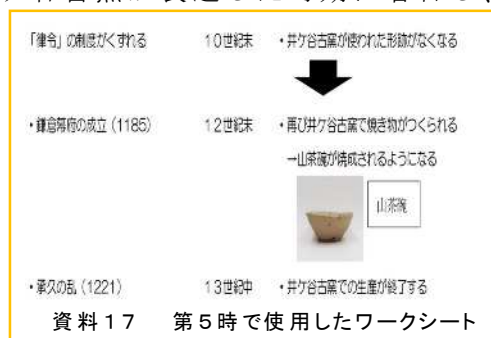
今日の授業で、井ケ谷のあたりは、はやりのにった大きな町だったのかなあと考えました。井ケ谷古窯は、「貢納」で貴族の文化を支えていたから、それなりに利益もあったし、大きくなっていったんじゃないかなと思います。灰釉陶器にとって、井ケ谷は適した環境で、材料も豊富だったこともあり、貴族の文化を生み出す側となり、それで発展したのだと思います。

資料 1 6 第4時の生徒 A の振り返り

4 2 枚の資料によって、井ケ谷古窯と承久の乱の影響を関連付けた生徒 A

第 5 時の導入で、「朝廷に貢納するほど有名になった井ケ谷古窯が、なぜ消滅したのか気になる」という生徒の振り返りを紹介した。そこで、井ケ谷古窯が衰退した時期に着目し、自作のワークシートを活用して調べる活動を行った。

生徒たちはこれまでの学びをいかし、井ケ谷古窯の発展と、中央史の関係に着目して考えた。特に、「承久の乱」と「井ケ谷古窯の生産終了」を結び付けて考えた生徒の意見は、「戦乱の影響で窯が壊されたり、使えなくなったりしたから消滅した」というものが多かった。井ケ谷古窯について、中央史の影響という視点で考えることができるようになってきていることが分



かる。生徒たちには、より多様な視点に着目して社会的事象を捉えてほしいと願い、生徒の新たな視点への気づきを促す資料提示を行った。

関連する資料から、承久の乱の影響を読み取り、「幕府側の地頭支配が強化された」と発言する生徒がいた。そして、地頭が交代した土地の中に愛知県も含まれていることに気づき、井ケ谷周辺も新たな地頭が任命されたのか気になっている様子であった。この生徒の反応を受けて資料18を提示した。資料18を読み取ると、刈谷でも、承久の乱による影響で地頭の交代があったことが分かり、「やっぱり」と納得する生徒の様子があった。

承久の乱(1221年)でこの地を治めていた重原氏が京都方についたため鎌倉幕府に荘園を没収され、代わりに、二階堂氏が地頭職に就いた

資料18 承久の乱の影響

そこで、「この2枚の資料の事実を関連付けて、井ケ谷古窯について考えられることは何かな」と問いかけた。生徒からは、「朝廷側の貢納のために発展した井ケ谷古窯だから、幕府側の支配した時には、井ケ谷古窯は必要ない」、「その土地を支配する人の方針に影響されて、発展するものと衰退するものが分かれる」といった意見が挙げられた。

生徒Aは第5時で、井ケ谷古窯の発展と、中央史の関係について4か所を関連付けて考えた。ワークシートを基に井ケ谷古窯が衰退したわけを考えると、資料19のように記述した。「律令」、「承久の乱」と、中央史の社会的事象を関連付けていることが分かる。そして、資料18を提示後の話し合いでは、生徒Aも承久の乱の結果や影響という視点で考えるようになり、「承久の乱後の地頭の交代によって、鎌倉幕府側の二階堂氏と、朝廷側の井ケ谷古窯の間でトラブルが起き、衰退に近づいたのではないか」と発言した。生徒Aはワークシートを活用したことで、中央史の社会的事象を井ケ谷古窯と関連付けることができた。さらに、ワークシートの活用を手助けとし、その後の資料提示によって、承久の乱の結果や影響という視点で考えることができた。生徒Aは、より多くの視点に着目して課題を追究することができたと言えるだろう。

井ケ谷古窯は、貴族や天皇に貢納したことで形成されていたから、律令がくずれたり、承久の乱が起きたりしたことで使われなくなったと考えられます。

資料19 第5時前半の生徒Aの考え

第6時では、井ケ谷古窯が発展した要因を「朝廷が井ケ谷古窯を支えていたから」とまとめ、理由を資料20のように表現した。「貴族中心の世の中」と「鎌倉幕府の武士の世の中」と、時代の変化という視点に着目し、比較して考える姿が読み取れる。これは第4時で、「貢納」について切り返し発問をしたことで、生徒Aが平安時代の朝廷と灰釉陶器の関係に気付いたことがつながっていると言える。また、第5時で資料18を提示したことで、生徒Aが井ケ谷古窯の衰退の原因を、承久の乱の結果や影響と関連付けて考えたことがつながっていると言える。より多様な視点を獲得した生徒Aは、時代ごとの変化を明確にして課題を追究する姿に至ったと言える。以上より、生徒の新たな視点への気づきを促す発問と資料提示の工夫は、有効に機能したと考えられる。

井ケ谷古窯は、平安時代は、貴族中心の世の中だったことで利益も大きくて、発展していったのだと思いました。そのため、鎌倉幕府の武士の世の中になって、鎌倉幕府の力が大きくなればなるほど、衰退していったということだと考えます。

資料20 生徒Aの考え(一部)

5 学芸員との対話によって、学びを深めた生徒A

第7時では、単元を貫く課題「なぜ井ケ谷古窯が発展したのだろう」について、話し合い活動を行った。授業開始時に、歴史博物館の学芸員を招いたことを伝え、紹介した。「井ケ谷古窯がなぜ発展したか、一緒に考えましょう」と学芸員の方から一言いただくと、生徒たちも目を輝かせるように話し合い活動への意欲を高めていた。

話し合いでは、「地理的な環境」に焦点が当たった。教師が「焼き物に必要な環境って何かな」と問いかけると、生徒たちは土、灰、気候、山と次々に発言した。生徒が、「後は何があるか聞いてみたい」とつぶやいたので、学芸員に質問することを促した。すると、「川

があるとより適している」と返答いただいた。生徒たちは「川？」と自分たちに無かった考えに戸惑いながらも、川の役割を考え始めた。資料 2 1 はその後の授業記録である。

C 2 「器作りに水が必要なのですか」や、C 5 「この時代に船はありますか」と自ら学芸員に質問をしている姿からは、学芸員との対話を通して知識を得ようとしていることが分かる。さらに、G T 「船を使うこともあると思います」に反応した生徒 A は、「貢納するための製品を船で運ぶためにも、移動手段として近くに川があった方が便利」と話した。生徒 A は、学芸員との対話を通して得た知識を活用し、「川」の役割について、自分の考えの根拠を明確にしていることが読み取れる。

授業の後半には、グループで学芸員と対話する時間を設けた。生徒が考えを伝えたり、専門家としての見解をお話しいただいたりした。資料 2 2 は生徒 A と学芸員の対話記録である。

生徒 A は灰釉陶器の独特な模様に着目し、学芸員へ質問を始めた。すると、学芸員から、模様は釉薬であること、独特な模様はデザインであること、権力ある日本の貴族たちの「中国へのあこがれ」であるという見解をいただいた。すると生徒 A は、「井ケ谷の発展は中国も関係するのか」と、学芸員との対話を通して得た知識を活用して、自分の考えを変化させる様子が見られた。

資料 2 3 は、第 7 時の生徒 A の振り返りである。「井ケ谷の気候や土地の形状（中略）ことが改めて分かりました」からは、学芸員との対話を通して、自分の考えの根拠を明確にしていることが分かる。さらに、『川』では、自然を利用して（中略）新しく分かりました」からは、話し合い前の生徒 A の考えから変化させていることが読み取れる。さらに、「中国へのあこがれ（中略）井ケ谷古窯の発展につながっている」からも、生徒 A が学芸員との対話を通して得た知識を活用して、考えを変化させ、根拠を明確にした姿と言えるだろう。以上より、博物館と連携し、専門家と対話する機会を設けたことは、生徒 A が他者と共に学びを深めるために有効な手だてであったと言えるだろう。

C 1 : なんで川がいるのだろう。
C 2 : 器作りに水が必要なのですか。
(学芸員 (G T) へ質問)
G T : そうですね。水は器作りの中で必要になりますので、それもあります。
C 2 : じゃあ、その水が手に入りやすいからか。
C 3 : 「それも」って、あとは何だろう。
T 1 : 井ケ谷古窯の器が有名になっていった出来事って何があったかな。
C 4 : 朝廷への貢納していたこと。
A : 朝廷へ貢納していたということは、その時代のはやりを生み出す場所だったから、それ
で有名になり、発展していったと思います。
T 2 : 貢納って、どうやって器を持っていくの？
(C : 歩き？馬？・・・船？)
T 3 : この時代に船って、あるの？
C 5 : この時代に船はありますか？ (G T へ質問)
G T 2 : そうですね。船を使うこともあると思います。
A : あ、だから川が必要なのか。
T : A さん、それってどういうことかな。
A : 貢納するための製品を船で運ぶためにも、移動手段として近くに川があった方が便利だから、川があるとより適しているんじゃないかって思いました。
資料 2 1 第 7 時の授業記録

A : (灰釉陶器の模様を指さし) これは何ですか。
G T : これは釉薬です。
A : どうしてこんなに垂れているのですか。
G T : 模様です。当時はこのデザインが好まれていたのですね。
A : どうしてこんなデザインが流行るのですか。
G T : 昔の貴族は、高級品が欲しくてですね。
当時、高級品と言えば、中国からの輸入品です。
A : (ああ、とうなずく)
G T : だけど、それは高すぎて買えないのですね。
A : なるほど、まねしているってことですか。
G T : そうだね。その、権力のある貴族たちの「中国へのあこがれ」もあって、生産を拡大していった可能性もあるね。
A : じゃあ井ケ谷の発展は中国も関係するのか。
資料 2 2 学芸員の方と生徒 A の対話記録

今日の授業で、井ケ谷の気候や土地の形状（土や山、川など）が大きく関わっていることが改めて分かりました。「川」では、自然を利用して朝廷に貢納していることが発展につながっていると新しく分かりました。
さらに、学芸員さんとお話して、中国へのあこがれが繋がっていると分かりました。たしかに、「中国を手本にして」と歴史の授業でもたくさん出てきたので、それも井ケ谷古窯の発展につながっていると分かって楽しかったです。もっとその時代のことについて知りたくなりました。

資料 2 3 第 7 時の生徒 A の振り返り

IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

本研究の主題は、「社会的な見方・考え方を働かせ、他者と共に学びを深める生徒の育成」である。目指す生徒像に挙げた、「(1) 社会的な見方・考え方を働かせる姿」と「(2) 他者と共に学びを深める姿」を実現することができたかどうか、生徒Aの変容を基に以下に述べる。

<仮説①について>

井ヶ谷古窯がはじまった頃の様子を調べる際には、自作のワークシートを活用したことで、生徒Aは資料12のように、「渡来人の人々との交流(中略)始まった頃が同じ」や「須恵器の技術をもった人が広い範囲で広めたから、井ヶ谷まで伝わった」と記述した。課題を追究する活動において、社会的事象同士の影響を関連付けて考える姿が見られた。また、井ヶ谷古窯が衰退した原因を調べる活動では、資料19のように、「律令」や「承久の乱」と中央史の社会的事象の結果や影響を関連付けて考える姿が見られた。よって、手だて①が有効に働いたと言える。

井ヶ谷古窯が発展した要因をまとめる際に、発問や資料提示の工夫をしたことで、生徒Aは、資料20のように「貴族中心の世の中」と「鎌倉幕府の武士の世の中」と、時代の変化という視点に着目し、比較して追究する姿が見られた。生徒Aはより多様な視点を獲得し、時代ごとの変化を明確にして考えることができたと言える。よって、手だて②が有効に働いたと言える。また、資料27から、Q3の生徒Aの回答が、1→3と上昇していることが分かる。以上のことから、仮説1は妥当だと言える。

<仮説②について>

単元の出合う段階では、実物資料を活用して、仲間と対話する場を設けたことで、生徒Aは資料9のように「渡来人も関係がありそう」と話した。これは、実物資料から捉えた細かい特徴を基に仲間と対話したことで、生徒Aが考えを変化させた姿と言える。また、資料10のように「作られている器の種類が変わっていった(中略)これから調べていきたい」と表現し、粘り強く課題を追究する意欲を高めている姿が見られた。よって、手だて③が有効に働いたと言える。

単元を貫く課題「なぜ井ヶ谷古窯が発展したのだろう」について話し合う際には、学芸員を授業に招き、対話する機会を設けたことで、生徒Aは資料23のように「中国へのあこがれ(中略)井ヶ谷古窯の発展につながっている」と表現した。生徒Aは学芸員との対話を通して得た知識を活用して、考えを変化させ、根拠を明確にした姿と言えるだろう。よって、手だて④が有効に働いたと言える。また、資料27からQ4の生徒Aの回答が、2→4と上昇していることが分かる。以上のことから、仮説2は妥当だと言える。

2 研究の課題

生徒たちは、課題解決に向けて非常に意欲的に取り組み、多くの他者と共に学びを深めていった。単元まとめの感想で、生徒Aが「学習を進めていくうちに、中央の歴史と地方の歴史はつながっているのだなぁとどんどん実感した」と表現したように、多くの生徒が身近な地域と日本の歴史を関連付け、多様な視点に着目して課題を追究することができた。それこそが大きな学習の成果であったと感じる。

しかし、本研究では身近な地域の歴史を扱ったため、資料収集や教材研究の方法に苦慮した。地域史の魅力を一層引き出す博物館との連携方法や、実践構想を模索していく。

資料24 単元後に実施したアンケート結果

社会科アンケート	平均値	生徒A
Q1: 愛知県や刈谷市の歴史に興味がある	3.20	4→4
Q2: 資料を基に考えをもつことができる	3.09	4→4
Q3: 2つの出来事を比較したり、関連付けたりして考えることができる	2.77	1→3
Q4: 色々な人の意見を取り入れて、考えを深めることができる	2.82	2→4
学級の生徒31人にアンケートを実施。以下の4段階で回答 4…とてもそう思う 3…そう思う 2…少しそう思う 1…そう思わない		

引用文献一覧

- ・ 文部科学省（2018）「中学校学習指導要領解説 社会編」東洋館出版社
- ・ 刈谷市教育委員会（2018）「わたしたちの郷土～刈谷歴史伝～」刈谷市教育委員会

参考文献一覧